

健康平和研究

23年第2章 人間と組織

基礎を反省 1

23年11月15日号より

(や＝山田 学)〔☆☆基礎を反省☆☆☆☆
山田は最近、ある場面に接し、ヨガの沖 正弘師 (1919～1985) の精神面を、再確認したくなりました。ここに、引用いたします。〕

(沖 正弘『ビジネスマン幹部のための菩薩道入門ヨガ総合健康法(下)』竹井出版1980年・8～14ページより)〔私の好きな^{ことわざ}諺に「仁は過ぐ可く、義は過ぐ可からず」というのがあります。つまり、何事も寛大で仁心の深いのは、多少行きすぎがあってもよいが、条理の行きすぎは過酷になるからよくないというのです。これは、企業トップや中堅幹部には、心すべき戒めではないでしょうか。私は道場では、つねに、会社幹部の入門者に信仰者になれ、と訴えています。信仰者になるということは、神仏を信仰するだけではないのです。信仰する心というのは、私流に言えば、他の人を拜むことができ、また、他の人から拜まれるような人になる心というのです。拜むとは他の人や物に対して愛情をもち、協力したい、喜びをあたえたいという心なのです。

幹部の職責にあるものは、部下から拜まれる人になってもらいたい。それには、寛大

で心の深い人物になることが条件です。その反面、業務上の過失については、追及がすぎはいけません。過酷になって、その人の心を傷つけるからです。罰則には手ごころが必要なのです。昔の人は、よく商人道ということをおこなっていました。これは、自分が喜び、かつ社会の喜ぶ^{あきな}商いの仕方をすることを商人道とみなしたのです。従って、こういう生き方を心がけることを^{ほとけごころ}仏心といい、そういう生活を菩薩道といったのです。菩薩とは、他を救うことに自己を捧げる修業者のことなのです。

私たちは、つねに物事を流動的に考えなければなりません。人を拜むことのできない人が、なんで人に拜まれることができましょう。同様に、自分の喜びが、そのまま社会の喜びでなければ、それは邪道です。流動的に考えることは、個と他を相対立するものと見るのではなく、個と他が合一されたところに、私たちの生活の営みが成り立つということなのです。菩薩道とは、これをいうのです。心すべきことでしょう。

人の上に立つ人は、リーダーシップを身につけなくてはなりません。私のいうリーダーシップとは、命令をしながら部下を引きつける力と、はげまし褒めたたえて、やる気を起こさせる押す力を、一つにしたものです。

「君の努力で、あの仕事もうまくいった。ありがとう」

と、部下の功績をたたえることが大切です。ささいなことでも、それを過大に評価してやることも、やる気を引き出すことに役立ちます。

このように、地位があがれば、命令することも多くなり、部下を引きつける機会も多くなります。といっても、人間は正直なもので、命令をされても、その部下はいわれたように動かないものです。その人に自信があればあるほど、自分のしたい方向に動くでしょう。

「上役の命令にしたがう。したがうことは自分の喜びや利益につながる」

ここからやる気が起こるので、この部下操縦術を身につけない幹部は失格です。部下をただ使うだけでは、部下から拜まれる幹部にはなれません。社員から拜まれないトップの下に、どうしていい社員が育ちますか。

最近、帝王学ということばが、たいへん流行しています。私にいわせれば、帝王学の基本になるのは、部下を引っぱる力と押しだてる力の合一にあると信じています。そして、この二つの力を合一するには、意識的に宗教心を身につけることがカギなのです。

「君が苦勞したお陰で……。ありがとう」この簡単な一言には、下座する心、奉仕の心、報恩の心などが要約されているのです。下座心とは、恩を売るのではなくて、面倒

をみさせていただく、助けてやるのではなくて助けさせていただく、使ってやるのではなくて、使わせていただくという心の構えをいうのです。

福沢諭吉は「天は人の上に人をつくらず」と喝破しました。これは人間の平等性をいっただので、人間には、人に命令したり、裁いたりする力はあたえられてはいないはずで、あたえられているのは、平等に助け合う心だけなのです。人間の社会は、いかなれば心と心とのつながりが根底になっています。資本主義が高度に発展した原動力は、いわば労使の協調、助け合いにほかならないのです。科学技術の発達は、その成果であることを歴史が実証しています。

ですから、私は道場を訪れる中堅幹部にあえて苦言を呈して、こういうのです。

「社員の方々が会社で働いていただくのは、私の人生勉強、あなたたちを通じて人間づくりの勉強をさせていただいているのです。社員の人たちは、私の恩人、それが故に、今日の私があるのです」

といてごらん下さい。口に出すことがいやだったら、せめても、こうした菩薩道を心得て、社員に接することが大切だ、と口をきわめていうのです。

子供は、今も昔も、親孝行をしなければいけません、親のほうでも子供の成長のために、あらゆる義務を果たさねばなりません。そして親と子の両方から、たがいにつ

くし合い、心を配り合い、恩を感じ合い、報恩し合うようしつけ合わねばなりません。

かつての忠義は、国や君主への忠義、孝行は親への奉仕といったあんばいに、万事、一方通行だったことは否めません。ここから破綻が生まれたのです。

「親にむかって、その態度、そのことばは何だ！」

などと、子供の前で大声を張りあげるのは、もう時代錯誤です。子供を叱る前に、自分は子供から尊敬されるに値するかどうかを反省すべきです。人権主義というのは、国家や労使関係ばかりにいうことではなく、親子のばあいにもいえることなので、これを無視しているのは、親のほう間違いだといってよいでしょう。

新聞記事に見る家庭の悲劇は、ここらに原因があると思います。労使関係でもそうですが、それぞれが自己主張ばかりしては、協調の精神は生まれません。今日、“敬老”ということがニュース種になっていますが、これは、いたずらに肉体面の高齢者を敬う意味ではありません。それにしても、どこへいっても、老人の資格のない老人がはらんしています。誰でも、自分の長寿を誇ることは結構ですが、それには心の老成が伴わねばなりません。生理的年齢を口にする人は、これも一方通行の人とみなしてよいのです。

昔から「蠟燭は身を減らして人を照らす」といわれています。自己を犠牲にして、他人の利益のためにつくすことをいっただのです。少なくとも、長寿を誇る人は、これくらいの気概を持たねば、“敬老”の価値はないと思っています。]

(や)[人間関係づくり、組織づくりについて、あらためて、基礎を反省いたしました。]